
巻き戻しの国

星垣ケイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

巻き戻しの国

【Zコード】

Z3372D

【作者名】

星垣ケイ

【あらすじ】

「貴方は誰?」大切な人を失った少女・絢は、真っ黒な空間で銀の髪の『時使い』に出会う。そして…

前編　　願い

「此処は……？」

気が付いたらそこは、何も無い、ただ、黒く染まつただけの空間だつた。

『……今日は。』

突然何処からか声が聞こえて来た。

「誰なの？」

そう、小さな声で言つたのに、私の声は真っ黒な空間の端から端まで響いた。

『私は名も無き存在。よつこじや、1228番田の迷い子。』

頭に響く低い声と共に、レースの付いた黒いドレスを着た銀髪の女性が黒の中から現れた。

「貴方は……？」目をぱちくりさせながら聞いた。

『……此処に訪れた迷い子に救いの手を差し伸べる』

銀髪の女性は一瞬、私を見つめて。

『……時使い、よ。』

「ときつかい？」

私は頭に疑問符を浮かべて首を傾げた。

『……そう、時使い。貴方が戻して欲しい時間に戻してあげる。』

言われて私はうーん、と唸つた。

戻りたい時間に戻れる。

それは、何時だっけ。

私が、戻りたい時間は。

ふと、ある人の顔が頭に浮かんだ。

私の、大切な人。

「由樹ーつ！」

少し遠くに居る男の子に声をかけた。

「絢。良かつた、来てくれて」

傍に駆け寄ると、由樹はホツとした様に微笑んだ。
「だつてせつからく由樹が呼んでくれたんだもん。……で、話しつて何
？」

聞くと由樹は申し訳なさそうな表情カオをした。

「由樹？」

「……驚かないで、聞いてくれる？」

そう言ひう由樹の顔が暗かつた。

「？……うん」

「実は……」

「……え？」

由樹が言葉を発したその時、大きな風が吹いた。

「…つごめん」

由樹は踵を返し、走り去つて行つた。

「……嘘」

取り残された私の瞳から、雫が垂れた。

「うわあああんッ」

私は泣くしかなかつた。泣く事しか出来なかつた。
あの言葉を聴いたから。

風が吹く中、あの言葉を聞き咎めてしまつたから。

『 由詠が死んだ』

中編 記憶

由詠は、私の大切な人だった。

病気がちな彼は、家から出る事が殆ど無かつた。だから私は、彼に外の世界を見せたかったんだ。だから、無理矢理に外に連れ出した。

そして …

私は、彼を殺してしまった。

由詠は、誤つて川に落ちた私を助けて、溺れたんだそうだ。事故直後、私は気を失っていたから何も知らなかつた。

3日後、目を覚ました時にメールが来て。

由樹が待つ、公園に向かつて、そして知つた。知つてしまつた。

私が彼を、殺してしまつた事を。

由詠《彼》が死んだ事を。

瞼の裏に在る、あの時の、確かな記憶。

瞼を持ち上げれば、黒い空間があつた。

『…戻して欲しい時間は決まった?』

銀髪の女性 時使いが私に聞く。

「うん。あの時…由詠が死ぬ前に戻して欲しいの」

『…分かつたわ。但し…』

『…分かつたわ。但し…』

「但し?」

『貴方の、為になるかは分からぬ。』

「…?」

絢は眉を顰めた。

「どう言つ事?」

『だから、』

時使いが言いかけた時、私の前で何かが光った。

「何?」

その光は、段々と形を作っていく。

その姿を見て、絢は目を大きく見開いた。

「由…詠…?」

光は、半透明だけれどもあの時の、由詠になっていた。

「何で…由詠が…」

どうして?

私が殺してしまったのに、何で?

『…その子は靈よ。もう死んでるわ。』

時使いが静かな、低い声で告げた。

「じ、じゃあ、何で此処に…」

聞くと、時使いは目を閉じて。

『貴方に、会いに来たのよ。』

「会いに?」

『ええ。…最初に言つたわよね?此処は…時間を戻したい者が来る
空間だ、と。』

「じゃあ…」

『彼も、その1人でしうね。』

絢は、由詠に恐る恐るといった感じで近付いて行つた。

「…由詠、なの？」

それに由詠は、何も言わずにこくりと頷いた。

「私に…会いに来てくれたの？」

『…うん』

「何で…私、貴方を殺したのに」
『殺されてなんか無いよ、僕は』

絢は由詠の答えを聞いて叫んだ。

「だつたら何で、此処に来たの！？生きたかつたんでしょ？死にたくなかつたんでしょ？だから、時間を戻したくて…」

『違う！』

由詠は絢の言葉を断ち切つた。

『…違うんだ…違う、そつじやないんだ…僕は君の、誤解を解きに來たんだ』

「誤解？」

何のこと？と絢が訪ねる。

『絢。聞いて。あの時僕が死んだのは、決して君が悪いんじやない』

『…それが言いたくて、時間を戻したいと思った』

「私のせいじやない？何で？」

『あの時絢を助けたのは僕の意思でやつたんだ。…そつだりつへ。』
「……」

『だから良いんだ。絢は何も悪くない、だから時間を戻す何て、しないで良いよ』

由詠は絢の頭を撫でて、微笑んだ。

それを見て絢は、泣きそうになつた。

「ごめんね、由詠…ごめんね…」

『だから良いって』

由詠は再度、絢に触れようとしたら…が。

『…っ』

絢に触れようとしていた、通り抜けてしまつ。

「あ…」

絢も目を見開いた。

『もう、お別れだ』

「…うん」

由詠が靈なのは分かつている。

だからずつと此処に居れる訳ではない事も分かる。

『バイバイ、ありがと』

『うん。もう、大丈夫？』

『大丈夫、時間を戻すなんてもう、思わないよ』

『…ちゃんとい、前を向いて歩いてく』

『うん。』

由詠の体が薄れていく。

そして、殆ど見えなくなつた時。

「さよなら、…大好き」

絢はそう、呟いた。

『…時間は…もう良いの?』

後ろから時使いの声がする。

「うん、色々ありがとうね、時使いさん」

『いいえ。…本当に良かつたの?』

「…うん」

「ちゃんと言えたし、それに…」

『それに?』

絢は泣きそうなのを抑えて笑った。

「由詠は、何時^じだって傍に居るって、分かったから」

『そう。…泣いても良いのよ?』

絢は時使いの方を向いた。

「良いの?」

『良いわよ。』

絢は時使いに抱き付いた。そして、

「うわあああんっ」

あの時の様に、大声で泣いた。

そうね。 そののかも知れない。

時間を戻す事によつて全てが変わる。

でも … もうひと

きつと、時間を戻さなくとも、変わることは出来る。

前を向いて歩いていけば…

そこには、きつと。
何かが在るはず。

だから人は、歩いていかなければならぬのだつ。

たと 喧え苦し^ムても。 辛くとも。

時間に支配された、この世界を。

そしてこの国は、耐えられなくなつた人の為に存在する。

時間を巻き戻す為に、存在する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3372d/>

巻き戻しの国

2010年10月28日03時28分発行